

蒼穹

梶井基次郎

青空文庫

ある晩春の午後、私は村の街道に沿った土堤の上で日を浴びていた。空にはながらく動かないでいる巨きな雲おおがあつた。その雲はその地球に面した側に藤紫色をした陰翳いんえいを持つていた。そしてその彪ぼうだい大な容積やその藤紫色をした陰翳はなにかしら茫漠ぼうぼくとした悲哀をその雲に感じさせた。

私の坐つているところはこの村でも一番広いとされている平地の縁へりに當つていた。山と溪たにとがその大方の眺めであるこの村では、どこを眺めるにも勾配のついた地勢でないものはなかつた。風景は絶えず重力の法則に脅かされていた。そのうえ光と影の移り変わりは溪間あわただにいる人に始終あわただ慌しい感情を与えていた。そうした村のなかでは、溪間からは高く一日の当るこの平地の眺めほど心を休めるものはなかつた。私にとってはその終日に倦あいた眺めが悲しいまでノスタルジックだつた。Louis-eaterの住んでいるといういつも午後ばかりの国——それが私には想像された。

雲はその平地の向うの果である雑木山の上に横よこたわつていた。雑木山では絶えずほととぎす杜鵑つばきが鳴いていた。その麓ふもとに水車が光つて見えるばかりで、眼に見えて動くものはなく、うらうらと晩春の日が照り渡つている野山には静かな懶ものうさばかりが感じられた。そして雲は

なにかそうした安逸の非運を悲しんでいるかのように思われるのだった。

私は眼を溪たにの方の眺めへ移した。私の眼の下ではこの半島の中心の山さんい臺からわけ出て来た二つの溪たにが落合おちあっていた。二つの溪の間へ楔くさびのように立っている山と、前方を屏風びょうぶのように塞ふさいでいる山との間には、一つの溪をその上流へかけて十二単衣ひとえのような山褶やまひだが交互に重なっていた。そしてその涯はてには一本の巨大な枯木をその巔いただきに持っている、そしてそのためにことさら感情を高めて見える一つの山が聳そびえていた。日は毎日二つの溪を渡つてその山へ落ちてゆくのだが、午後早い日は今やつと一つの溪を渡つたばかりで、溪と溪との間に立っている山のこちら側が死のような影に安らっているのがことさら眼立っていた。三月の半ば頃私はよく山を蔽おほった杉林から山火事のような煙が起こるのを見た。それは日のよくあたる風の吹く、ほどよい湿度と温度が幸いする日、杉林が一斉に飛ばす花粉の煙であった。しかし今すでに受精を終わった杉林の上には褐色がかつた落ちつきができていた。瓦斯ガス体のような若芽に煙けっていた榲やきや榲ならの緑にももう初夏らしい落ちつきがあった。闌たけた若葉がおのおの影を持ち瓦斯体のような夢はもうなかつた。ただ溪間にむくむくと茂しっている椎しいの樹が何回目かの発芽で黄な粉をまぶしたようになっていた。

そんな風景のうえを遊んでいた私の眼は、二つの溪をへだてた杉山の上から青空の透い

て見えるほど淡い雲が絶えず湧いて来るのを見たとき、不知不識しらずしらずそのなかへ吸い込まれて行つた。湧き出て来る雲は見る見る日に輝いた巨大な姿を空のなかへ拡げるのであつた。

それは一方からの尽きない生成とともにゆつくり旋回していた。また一方では捲きあがつて行つた縁へりが絶えず青空のなかへ消え込むのだった。こうした雲の変化ほど見る人の心に言い知れぬ深い感情を喚よび起こすものはない。その変化を見極めようとする眼はいつもその尽きない生成と消滅のなかへ溺おぼれ込んでしまい、ただそればかりを繰り返しているうちに、不思議な恐怖に似た感情がだんだん胸へ昂たかまつて来る。その感情は喉のどを詰らせるようになつて来、身体からは平衝の感じがだんだん失われて来、もしそんな状態が長く続けば、そのある極点から、自分の身体は奈落のようなものなかへ落ちてゆくのではないかと思われる。それも花火に仕掛けられた紙人形のように、身体のあらゆる部分から力を失つて。――

私の眼はだんだん雲との距離を絶して、そう言つた感情のなかへ巻き込まれていった。そのとき私はふとある不思議な現象に眼をとめたのである。それは雲の湧いて出るところが、影になつた杉山のすぐ上からではなく、そこからかなりの距へだたりを持つたところにあつたことであつた。そこへ来てはじめて薄うすり見えはじめ。それから見る見る巨おおきな姿をあ

らわす。――

私は空のなかに見えない山のようなものがあるのではないかというような不思議な気持ちに捕えられた。そのとき私の心をふとかすめたものがあつた。それはこの村でのある闇夜の経験であつた。

その夜私は提灯ちようちんも持たないで闇の街道を歩いてゐた。それは途中にただ一軒の人家しかない、そしてその家の燈ひがちようど戸の節穴から写る戸外の風景のように見えている、大きな闇のなかであつた。街道へその家の燈ひが光を投じている。そのなかへ突然姿をあらわした人影があつた。おそらくそれは私と同じように提灯を持たないで歩いてゐた村人だつたのであろう。私は別にその人影を怪しいと思つたのではなかつた。しかし私はなんとなくことなく凝じつと、その人影が闇のなかへ消えてゆくのを眺めていたのである。その人影は背に負つた光をだんだん失いながら消えていった。網膜だけの感じになり、闇のなかの想像になり―― ついにはその想像もふつり断ち切れてしまつた。そのとき私は『何処どこ』というもののない闇に微かな戦慄せんりつを感じた。その闇のなかへ同じような絶望的な順序で消えてゆく私自身を想像し、言い知れぬ恐怖と情熱を覚えたのである。――

その記憶が私の心をかすめたとき、突然私は悟つた。雲が湧き立つては消えてゆく空の

なかにあったものは、見えない山のようなものでもなく、不思議な岬みさきのようなものでもなく、なんとという虚無！ 白日の闇が満ち充ちているのだということ。私の眼は一時に視力を弱めたかのように、私は大きな不幸を感じた。濃い藍色あいいろに煙りあがったこの季節の空は、そのとき、見れば見るほどただ闇としか私には感覚できなかつたのである。

青空文庫情報

底本：「檸檬・ある心の風景 他二十編」旺文社文庫、旺文社

1972（昭和47）年12月10日初版発行

1974（昭和49）年第4刷発行

初出：「文芸都市」

1928（昭和3）年3月号

※表題は底本では、「蒼穹《そうきゆう》」となっています。

※編集部による傍注は省略しました。

入力：j.ujiyama

校正：野口英司

1998年10月20日公開

2016年7月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

蒼穹

梶井基次郎

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>